

色が語る

中国のくまどりと詩・楽

王敏
著



朝華出版社
BLOSSOM PRESS

色が語る

中国のくまどりと詩・楽

王敏 著



图书在版编目(CIP)数据

中国脸谱、诗乐与色彩：日文 / 王敏著. — 北京：
朝华出版社，2015.12

(梅樱书系)

ISBN 978-7-5054-3460-8

I. ①中… II. ①王… III. ①戏曲—脸谱—介绍—
中国—日文②古典诗歌—介绍—中国—日文③古典音乐—
介绍—中国—日文 IV. ①J821.5 ②I207.22 ③J609.22

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 309296 号

色が語る中国のくまどりと詩・楽

(中国脸谱、诗乐与色彩)

作 者 王 敏

责任编辑 焦雅楠

特约编辑 杨 莉

责任印制 张文东 陆竞赢

封面设计 仙境设计

制 作 北京维诺传媒文化有限公司

出版发行 朝华出版社

社 址 北京市西城区百万庄大街 24 号 邮政编码 100037

订购电话 (010) 68413840 68996050

传 真 (010) 88415258 (发行部)

网 址 <http://zhcb.cipg.org.cn>

印 刷 虎彩印艺股份有限公司

经 销 全国新华书店

开 本 787mm × 1092mm 1/32 字 数 85 千字

印 张 4.25

版 次 2016 年 1 月第 1 版 2016 年 1 月第 1 次印刷

装 别 平

书 号 ISBN 978-7-5054-3460-8

定 价 18.00 元

版权所有 翻印必究 · 印装有误 负责调换

はじめに

今から何万年も前の氷河が、あるとき溶けはじめた。その氷河から流れ出た黄色い砂や泥が、黄河の肥沃な流れとなった。この流れは人類最古の民族、中華民族を慈しみ育てた。

彼等は山の頂上で、川の辺で、他の生き物の如く太陽に向かって踊った。自らの手で石を叩きながらリズムをとり、トーテムの生き物の仮面を被り歌った。

素朴なこのトーテム舞踏は、舞踏者にどれほど自覚され、意識されていたかは定かではないが、直観的知性である“ヌース”の活動が永遠不滅であり、信念のような“定心”が不動である故に、トーテム舞踏の“ふるまい”の歩みの跡から原始信仰の礎が築かれ、そこから儒教・道教の種が芽生えたのである。

さらに、トーテム舞踏に潜在していた“ヌース”と“定心”は、“仮面”と“くまどり”に移植され、中国文化史に「くまどり芸術」の一ページを開いた。

「くまどり芸術」は、上古時代のトーテム信仰から始まり、後にトーテム舞踏→儺舞→百戯→社火→戯劇と

長い年月を経て、現代の戯劇芸術として一つの分野を完成させ確立した。“くまどり”という芸術は、誕生した時期から他の芸術分野との融合・相乗作用によって、多種多様な芸術様式を生み出しながら共存してきた。特に、詩と音楽と色彩のハーモニーが無かったならば中国文化史における「くまどり芸術」の灯しは消えていたであろう。そして、筆者もまた幽玄なる魂の息吹に触れることは無かったであろうと考える。

悠久の大地の深遠な文化史を華やかに彩った「くまどり芸術」——その源流を探る事を通して中国人の文化心態の理解に少しでも参考になれば、望外の喜びである。

最後に、朝華出版社の汪濤社長と焦雅楠編集主任及び人民中国雑誌社の賈秋雅社長補佐に深く感謝申し上げます。

著者

目次

はじめに

序 章 1

第1章 トーテム舞蹈に育まれたくまどりの種 5

「くまどり芸術」の原点 5

文化を生み育てたトーテム舞蹈 7

トーテムの表現がくまどりの素地に 9

第2章 上古時代の仮面 15

仮面の起源とトーテム 15

トーテムを擬した踊りの扮装 19

仮面は祖先に近づく媒体 21

第3章 信仰のオリジナル 25

周王朝と龍トーテム 25

“鬼”は先祖の象徴 29

権威の象徴に見るトーテム 31

現れた蜀王国と青銅の仮面 33

第4章 儺舞の発芽 37

大儺の起源 38

宮廷における“国儺” 40

巫文化の影響 42

儺舞から儺戯へ 43

目次



第5章 百戯および戯劇の開花	49
“角抵”の起源と変遷	49
“百戯”が促した戯劇芸術の形成	52
唐王朝における中国劇の形成	54
第6章 百花撩乱の社火	59
土地信仰の歴史	60
“社火”は雑戯の総称	63
宋王朝における“社火”	66
雑劇が育てた“南劇”	68
第7章 くまどりの結実	71
元王朝における“雑劇”	72
雑劇とくまどり	74
反動の中から生まれた自我意識	75
京劇の誕生	79
京劇とくまどり	80
第8章 詩・楽共同体と色彩の対話	85
1——「詩・楽共同体」の要素	85
2——「色彩」の要素	101
3——くまどり芸術に共存する	118



序 章

伝統的な習わしに則って、俳優や舞踏家が色とりどりの顔料を使い、各演者の顔を特徴的に彩る。その特徴は演じる役柄の人物の性格・表情・そして身上的なものを鮮明に誇張表現し、ある一定の秩序を保ちながら化粧術を施す。これが「くまどり芸術」といわれているものである。このくまどりと共に重要な存在が仮面である。

この仮面はくまどりの原形的存在であり、芝居や舞のための重要な小道具でもあり、補助的役割をも担う「くまどり芸術」には欠かすことのできない存在である。しかも、両者は、観衆に登場人物の役割や性格を明確に理解できるように工夫されている。

くまどりの場合は登場人物の顔に直接色彩を施しており、仮面の場合は登場人物・動物・妖怪などの顔を彫刻したものを造って、それを被りながら演じる。つまり、両者はそれぞれの表現形式は異なっているが、あくまでも表裏一体の関係でもある。

さて、中国における「くまどり芸術」は各民族の伝



統文化の象徴として大いに発展してきた。今や中国そのものを象徴的に表現する場合にも、この“くまどり”が用いられているようである。例えば外国で開かれた中国物産展の店先に必ずといってよい程くまどりが描かれているのが目撃される。これは中国を端的に象徴する場合のイメージとして大変わかり易いためであろう。

中国国内で、近代西洋の舞台（演劇）芸術が知られるようになるまでは、中国式のこれらの舞台（演劇）芸術が人びとの心を癒していた。もちろん今日もなおその勢いは衰えず、ファンは数億にものぼっている。この理由の一つとして考えられることは、くまどりや仮面で表現されているものが一般民衆の日常に深い関わりがあり、親近感を感じさせ、古来の伝承から生じる幽玄にして華麗な演出が一種の普遍的要素を伺わせているという事であろう。そしてこれが大衆の共感を呼び起こし、今日に至るまで存続しているのであろう。

それではくまどりや仮面は如何なる具体的な意味を持ち、如何なる歴史的意義を創り出していったのだろうか。

まず、モチーフとしては中国神話・伝説、宗教説話の中の神・仏・鬼・妖怪などを表現するためにくまどりや仮面を使う。さらには各民族・国家の歴代帝王・将軍・大臣・英雄・美女・有名人そして口承伝説中の人物・さまざまな文学中の人物・精霊なども加えられる。

これらの登場人物は民衆に歴史を語り、正邪・善悪

を教える。さらに、その中にひそむ規範のようなものはその他の芸術である彫刻・絵画・民芸品などの分野にまで影響を及ぼしている。同時に、祭礼行事やその他の宗教的行事・儀式・娯楽文学・哲学・言語など人びとの生活における一切の営みにも浸透していき、中国人の思考価値にも有形・無形の影響を与えた。

今や中国の文化や人間を語り理解するためには、「くまどり芸術」についての知識が必要不可欠だと言っても過言ではない。



第1章

トータム舞踏に育まれたくまどりの種

「くまどり芸術」の原点

演劇史の研究者の間で「くまどり」の原点と位置づけられている歌舞がある。それが「蘭陵王入陣曲」¹⁾である。

この歌舞は南北朝（420～589）の北斉（550～577）の人の楽曲を基にして作られ、²⁾ 蘭陵王に使用された仮面が「くまどり」の原点になっているといわれているが確かな史料は少ない。この原点を探るために幾つかの史料を検討し、エピソードを拾い挙げてその一部を列記してみると次のようなものがある。

- ① 1500年前、北斉国の大將軍で蘭陵王という勇猛果敢な武者がおり、名を高長恭（孝瓘という名の説もある）といった（文襄帝の第四子との説もある）。この勇者は紅顔の美少年の如く大変な美形であったが、本人はいたく悩んでいた。何故ならば戦場におては修羅の如く猛々しい働きをするのだが、美形であったために敵を威圧する



だけの迫力に欠け、敵将達に甘く見られていたのである。そこで彼は一計を案じ、見るからに恐ろしく周囲を震え上がらせるような仮面を作り、戦場では必ずその仮面を被って戦うようにした。

以来、蘭陵王が戦場に現れただけで敵軍は、彼を軍神・鬼神の化身の如く恐れて戦わずして敗走した。勝ち誇った蘭陵王の軍がそのたびに歌ったのがこの曲であつたという。

本来この歌舞は、仮面を被って演じるのが特徴的であつた。この特徴ある曲に蘭陵王のエピソードや斉の後主であつた高緯に殺害された不幸な死の様子を加えて後世に、蘭陵王を賛える曲となった。³⁾ さらに舞台では演者に彼の勇姿を演じさせてから、この歌舞は大いに人びとの共感を得、名曲となり「大面」「代面」などと呼ばれるようになった。

この事は、唐の崔令欽が『唐書・教坊記』に「大面、北斉に出ず」と強制的に記録している。

- ② 春秋時代（前 770 ～前 403）、揚子江流域下流に伝わる「断髪文身（髪をきり身体に入れ墨をした野蛮な風習）」の越人⁴⁾と西南地方少数民族の古い習慣である入れ墨やおはぐろが原点であるとする説がある。
- ③ さらに、周王朝（前 1020 ～前 249）の魔除けの儼舞⁵⁾に原点があるとの説がある。これは比較的史実に忠実であるようだが、もう一つ決定的なもの

に欠ける。

さて、以上のようにさまざまな原点説があるのだが、視点を少し変えてみると、実は「くまどり芸術」の原点は原始氏族時代のトーテム舞踏を起源としたトーテム信仰の原型へつながっていた。

文化を生み育てたトーテム舞踏

この淵源であるトーテム舞踏は、今日の教育や音楽、芝居、そして各芸術の母型の一部となり同時に原始部族の祭礼・偶像・娯楽などの主たる形式にもなっていたのである。

つまり長い歴史の流れの中でこの舞踏は仮面や「くまどり芸術」を生み、大地に撒いた種がスクスクと育つように、あらゆる文化をも生み育てていったのである。

原始時代の人びとの日常生活にとって、大地が育んできたあらゆるものが恵みであり、自然（草木・動物・太陽・月・大地等々）に対する畏敬の念が必然的に信仰となり、その神聖化された自然と、自分たちに生きる知恵を伝承してくれた祖先に対する尊敬の念が入り混じり、各々の一族のトーテムへと変遷し発展していったのである。

このトーテム信仰により、彼等は祖先の霊がトーテムに宿り、自分や自分の一族・氏族などに幸運をもたらし、守ってくれると考えていたようである。

元来この信仰は、旧石器時代（2～3万年前）に形



成された「母系家族社会」を基盤にしており、家長としての女性たちが主役であった。故に最初の「姓」なども女系の祖の名に由来し、総て「女」偏がつけられている。例えば、伝説上の帝王炎帝⁶⁾の一族は「羊祖母」の子孫であるといわれていたので、「羊」の「女」に生まれた意味をとって「姜」という苗字をつけたり、夏王朝の禹⁷⁾の一族は「蛇祖母」に生まれたといわれ、その子孫は祖先の独特な存在を示す“姁”という苗字をつけたりしている(この“以”の文字は古代文字で“𠂔”と書かれておりこの形が蛇の姿である)。その他の例としては下記のもものが挙げられる。

嬴→少皞⁸⁾の一族の姓

姚→舜⁹⁾の一族の姓

媯→舜の末裔の姓

姬→黄帝¹⁰⁾の一族の姓

嫫→祝融¹¹⁾の一族の姓

また、古代における自然信仰・祖先信仰・トーテム信仰の求心的役割を女性が担い、この三種の信仰体系がトーテムに統合されて人びとに流布していったのがトーテム舞踏であった。

つまり、原始舞踏と呼ばれているものは、各動物の異性への誘い・アプローチに過ぎなかったが、トーテム信仰の中に他の信仰体系が融合され始めてからは、同血・同族といった血縁関係を持つ人びとに巨大な吸

引力を発揮する手段となり、原始舞踏もまたトーテム舞踏へと変化していった。この融合変化は、厳しい大自然と人間との戦いにおける知恵を生み出し、集落を作り、各人がそれぞれの得意な役割を担って同血・同族を守りながら生存を計り、大自然に比べ圧倒的に弱い存在の自分たちの生存戦略としていったのである。

トーテムの表現がくまどりの素地に

戦争・狩猟・農作などの勝利・成功を祖先に祈り守護を乞う際に、人間と神霊の間を往来できる巫師や部族の長が部族民をリードして踊るようになったのである。しかもこの時の踊り手はトーテムの対象に近い格好をさまざまに工夫して舞うのである。

そして、人びとはこのような舞踏を通して先祖の象徴であるトーテムに近づき、自分たちが子孫である事を認めてくれるように乞い、この真剣で敬虔な舞いにより先祖（トーテム）の祝福が得られると考えていた。

これに関連した数多い文献の一部を紐といてみると、まず漢の学者である袁康の『越絶書（周時代の越国の興亡書）』に呉・越（春秋時代の揚子江下流あたりの国名）の説話が多く記載されている。その中で「越人、断髪文身、以像龍子、以示尊榮也（越人は、髪を剃り落とし、身体に文を書き、龍子の像を彫り、自分が尊く榮える事を示す）」と書かれた箇所がある。この古代の越人は龍蛇の鱗の模様の入れ墨を彫り、龍船を漕ぐ習慣を持っており、



今もなおこの習慣は中国南方系の漢民族とタイ族¹²⁾（古代越人の子孫）に引き継がれている。

また、今日の中国の人びとも節句や祝日などには龍灯を掲げて祭事を行い、それらの龍灯¹³⁾を観賞して楽しんでいる。これは紛れもなく拝火信仰と龍崇拜のトーテム舞踏の遺風である。

何故このような風習が残ったのであろうか？

その一つの理由としては、伝説上の黄帝や炎帝は龍身であり、炎帝は火神ともされていたからであろう。龍に関しては地球上に実在しない動物であるが、中国人独特の創造的な神話などには、龍に乗った神や王が度々登場している。

例えば『説文』などには“祝融（夏の神・火を司る神・南海の神の事をいう）二匹の龍に乗る”とあり、『大載礼・王帝徳』には“顓頊（黄帝の孫・高陽氏の事）が龍に乗り四海に至る”とある。この神話などから想像を逞しくして考えていくと、おそらく異なる民族の異なるトーテムが併合・融合されて龍のトーテムが作られたのではないだろうか。

さらに四川省の平武地方にはチベット系の白馬人¹⁴⁾がいる。彼等は先祖を祭る時にパンダや熊の頭を利用して舞うが、白熊部族の場合はパンダの格好（パンダの皮を着て頭にはパンダの頭部をのせる）で、黒熊部族は同様な黒い熊で舞踏の主役を演じ舞うという。

また、甘粛省の博峪文県の人びとは古代のサル部族の子孫といわれ、先祖を祭る時に巫師が木の皮を被り、サ